研究報告）きもの姿における「おはしょり」の実践的研究
－江戸時代の「おはしょり」に学ぶ新たな着付けの一考察－

A practical study of “Ohashori” in kimono style

山野愛子ジェーン 1)　青木和子 1)　佐藤美奈子 1)

抄 録

女性のきもの着付けにおける「おはしょり」の始末は、着付け技術と時間を要する。これが、きもの離れにつながる要因の一つとも言われている。現在の「おはしょり」は江戸時代には存在せず、裾はそのまま着流していた。室内では裾をひきずっていたが、外出の際はたくしあげたり、褄（つま）を取って着る、あるいは両手を使うための「抱え帯」や「しごき」のような細い紐で前見頃をはしょった。本研究では、江戸時代の人々の着方を考察し、実際に「おはしょり」始末の実践研究をすることで、現在のきもの着装法に新たな提案をする。

キーワード：おはしょり　江戸時代　きもの着付け　新しい着装法　黄金分割

I.　はじめに

「おはしょり」とは、女物長着において着丈より長い部分を腰の高さで持ち上げ、腰ひもで絞めてバランスのよい着丈の調整すること、また、その場所を指す。

『広辞苑』[1]には、「はしょる［端折る］（ハシオルの転）①和服の褄などを折りかがげて帯に挟む。おはしょりにする。②はぶいて短く縮める。省略する。簡単にする。「話を―る」」とある。

先行研究には、遠藤武著「近世女装における抱帯の研究」[2]において、「抱帯」を用いて前見頃をはしょり足さばきをよくすることに着目した研究や、福田博美著「「おはしょり」形成の過程」[3]では、「おはしょり」形成の過程を時代順に辿り、和服裁縫書から用語の初出を捉えた研究がある程度で、「おはしょり」に関する研究は少なく、実践研究はない。

本研究では、まず江戸時代の人々が今日のような「おはしょり」をつくらずにいた状態を当時の文献を基に、初期中期後期に分けて鑑みる。次に、現在の着方になった背景と現在の「おはしょり」がどのようになっているかを検証する。さらに、そこから見える「おはしょり」の課題を整理し、今後の展望を考察してみた。考察の方法は実践法とし、実践研究としてまとめた。その結果、現代の着装法には、昭和の時代に着付け教室が推奨した内容が大きく影響していることが見えてきた。そもそも「きもの」そのものは、身体にやさしい多様性のある衣服であることが多方向から研究されている。一方では、昭和から励行されている一定の着用法を今後も継続することは、「きもの」の持続可能になんらかの影響があるのではないか、という大きな課題が前提にある。過去の自由な装い方を新たに提案することは、多様性のある衣服の本質を見失わず、時代を乗り越える持続可能な着付け実現のために有益であり、複雑で時間のかかる着方によるきもの離れを防ぐ一助になるのではないかと考える。

II.　江戸時代の「おはしょり」着装

江戸時代の庶民衣服は、小袖に帯であった。小袖は、装束の一番内側の衣服であったものが、室町時代に表着に昇格したとされる。

江戸時代初期

（図 1）「風俗図屏風」（彦根屏風）国宝 滋賀県 井伊氏

1）　YAMANO Aiko Jane AOKI Kazuko SATO Minako
山野美容芸術短期大学
連絡先:〒192-0396 東京都八王子市鑓水 530

[1] 新村出編『広辞苑』第 5 版　岩波書店　1998 p.2139
[2] 遠藤武著『遠藤武著作集』第 1 巻　服飾編　1985 pp.221-237
[3] 福田博美著 『文化学園・文化学園大学短期大学部紀要』 第 49 集 pp.9-15

江戸時代初期の小袖はゆったりと幅が広く、裄が短く、仕立ては対丈（図 1）であったので、「おはしょり」は存在していなかった。

江戸時代中期

寛文五年（1665 年）に反物の丈が定められ、着丈が長くなった。これにより、小袖の裾が長くなり、見頃が細くなったため、引きずらない程度に前見頃を手でたくし上げたり、ただの紐ではなく「しごき帯」や「抱え帯」を締めた帯の下の部分に巻き、そこに見頃を挟んでいる。（図 2,3,4）

（図 2）生川正香著『近世女風俗考』

（図 3）鈴木春信 画『風俗四季哥仙 竹間鶯』

（図 4） 鳥居清長画「美南見十二候」「五月・物詣」

江戸時代後期

文化文政期以降の小袖の丈は、元禄頃と比べると相当長くなり、ほぼ現代の寸法と変わらないものとなった。江戸中期以降から見られる、身頃を帯にはさむ（図 5 左）、しごきにはさむ（図 5 中央）、抱え帯にはさむ（図 5 右）、といった「おはしょり」を身分に関係なく（図 6）行っていた。

また、えりを抜いて、裾を広げて着ることで、西洋のドレスにおけるトレーンと同じ効果をもたらし、帯を締める位置の上下を黄金分割（3:5）にすることで、美しいシルエットを生み出したとされる。（図 7）

このように、当時は毎日着る日常衣服であったことから、今日のような複雑で窮屈な着方ではなく、用途に合わせ、個人個人が自由にゆったりと着ていたことが伺える。

（図 5）喜田川季荘 編『守貞謾稿』巻 11

（図 6）　楊州周延画「山里の七草」
『千代田城大奥の風俗 江戸錦』

（図 7）　喜多川歌麿筆「夏姿美人図」遠山記念館蔵

III. 現在の「おはしょり」の普及

明治・大正にかけては、洋装が急激に押し寄せた時代であるが、江戸時代の装いは続いていた。1900 年の雑誌「流行」には、「腹の辺にカンガルーといふ獣の如く、無益の袋を作るは真に抱腹なり」と掲げる文章がある。

樋口一葉（1872-1896）は、「よもぎふにつ記」において「ところでおかしいのは花圃のきつけが下手くそで、おはしょりは大きく袋がくっついているというあんばいだから、その場にいあわせた田中みの子が支度をし直す。」という明治 20 年のできごとを、また、夏目漱石（1867-1916）は、明治 40 年に発表した『虞美人草』で、「在来りの銘仙の袷を、白足袋の甲を隠さぬ程に着て」とき ものの裾線が程よいところに納まっていると、明治の文豪も細かい描写をしている。

男性の洋装化の進み方より相当遅かった女性の装いも昭和に入り、終戦とともに洋装が普及することになり、次第にきものの位置づけが変化し、「おはしょり」は活動的で、「引き裾」は礼装的と捉えられていくようになる。

そして昭和の中頃から、きものは非日常の衣服である礼装となり、生活の中にある着方から見た目の美しさに比重が置かれ、持ち上げた「おはしょり」の美しい整え方に一定のルールが生まれ（図 8）、この頃から、きものの着付け教室が生まれている。

（図 8）平岡権八郎　大正 14（1925）年
東京銀座 松屋呉服店のポスター

Ⅳ. 現在の「おはしょり」のつくり方

きもの本体の部分名称として「おはしょり」はないが、着用する過程で登場し、その部位が着付けの仕上がりに関わってくる仕組みである。そのプロセス（過程）は次の通り。

写真１：きものを羽織ると着丈より長い部分が認められる
写真２：長い部分を上に持ち上げて、裾の長さを自分の背丈にあわせて整える
写真３：下前、上前を調節し紐で押さえて結ぶ

写真 1

写真 2

写真 3

「おはしょり」はここ（写真 4）で登場する。

写真 4

写真 5

写真 5 の赤枠の部分が、写真 4 では腹部周辺に端折られている

「おはしょり」を伴う現在の装い方は着付けの流派や着用の用途に関係なく推奨されている。

これまで、「おはしょり」とは、きものの丈の長さを着用する人に合わせて調節した部分を指すことを示してきた。さらに、その着用方法が現代の一般的な着付けであることも検証してきた。しかしながら、歴史上の装いに見る「おはしょり」と現代に一般化された「おはしょり」は、【端折る】という目的で一致しているものの、その始末（整える）について大きく異なっていることに気が付く。

ここでもう一度、「おはしょり」の見え方を比較してみる。

左（図 2）生川正香著『近世女風俗考』
紐で結び無造作に出ているおはしょり

右（図 3）鈴木春信 画『風俗四季哥仙 竹間鶯』

2 つの図を比べると、一方は無造作に、もう一方は紐で結んだ後に形を一定に整えていることがわかる。

整える方式に形づけたおはしょり

大正、昭和にかけてきものの装い方が変化してきたことに伴い、「おはしょり」の部分をどのように取り扱うかを取りただす風潮に変化してきたのではないかと予測される。

おはしょり①　おはしょり②　おはしょり③

おはしょり① おからげを整える。中に手を入れて上前の分だけを舟底に形ずけ、あとは平にしてしまう。
おはしょり② おはしょりの長い場合は、上にあげ、下の線は舟底のようにつくる。
おはしょり③ おはしょりは約 6 ㎝くらいにして、足を長くすっきりとみせましょう。

（山野愛子著『日本髪と着つけ全書』婦人画報社 1960 年発行）

V.　現在の「おはしょり」の展開

「おはしょり」の扱いは、現代の着付けのテクニックにおいてほぼ同一の形に整えておくことを好む傾向にあることがわかった。着丈の長い部分を端折る理論によれば、個人の背丈によって端折る長さは異なることが想定される。ところが、たくし上げる余分の分量に関わりなく、「おはしょり」として見せる範囲には、昭和時代から一定の感が求められてきたことに気が付く。そこで現代にどのような一定性が示されているのか調べてみた。

現代の「おはしょり」の基準事例

山野流 着装教室	左側で帯下から 10 ㎝が基準
長沼静 きもの学院	左脇で約 7～8 ㎝で美しい形になる
着付け職種 技能検定	衿の接点からおはしょり下線まで約 40 ㎝
日本和装	帯の下から人差し指 1 本分（6～7 ㎝）左側で帯下から 10 ㎝が基準
全日本婚礼 美容協会	帯下から 6 ㎝

山野流例

他流派例

上記のいくつかの基準事例から、長さを 6 ㎝から 10 ㎝に収めていることが整理された。なぜこの長さが推奨されるのかについては、諸説ある中でも、ここでは黄金比（ツァイジング（1810～1876））が唱えた 3 対 5 対 8 のプロポーションとそのバランス観に基づくものとする。その上で、「おはしょり」の整え方に一定性を求める必要があるかどうかを疑問視したい。なぜなら、筆者等は日常に着付師として、着付けを習いたい一般人、美容師、美容学校生に着付けの手順を指導するプロセスにおいて、この「おはしょりの始末」のテクニックを習得することに難航する（時間がかかる。やり方がわからなくなる。見えない箇所を手探りで実施することにストレスを感じる）人が比較的多くいるからである。

きものは紐 2 本で簡単に着用できる点で利便性が高い。1 本は腰あるいは腹部分を、もう一本で胸元を押さえるだけで、着崩れすることなく身体にまとうことができる。この 2 本の紐をしめた後の「おはしょり」の処理が上手くできないことが、着付けが難しいと感じる要因であるならば、そこを改善する方法はないものかと検証してみた。新しい着装法の提案として、過去の市民の装いに改めて目を向けて実験したことを、以下に報告する。

検証①【「おはしょり」を整えるための実例】

◆「おはしょり」の確認

おはしょり拡大図

◆現代の「おはしょり」の実例

約 30 ㎝程度の身丈の余分を腰にたくし上げて、帯下から平均 7 ㎝程度を見せる部分として整える技術規範例

◆新しい着装法の提案

A

B

A と B は共に、「おはしょり」をつくらずにきものの着丈をそのまま着用する方法。身丈より長い部分をそのままおろしておく。この場合、現代人のスタイルが長身化していることで白生地尺が足りない問題にも対処が可能。ただし、足さばきと歩行に支障が出る場合に備え、B は抱え帯を使用して裾上げが楽にできるよう工夫した。

歩行の際に手を添える例と抱え帯にはさむ例

振袖着付けの場合の実験の様子

実践の考察として、きものの着丈の余分をたくし上げる方法と着流しの方法（以後は着流しの着用法を仮称：姫流しとする）について、5 人の着付師が実際に着用して比較検討した。着付け時間、視覚バランス、インパクト、歩行について検証し、以下のように簡単に整理した。

	おはしょり着付	姫流し着付
着付け時間	5 分程度	3 分程度
バランス	おはしょりの下線位置で上半身と下半身の視覚的バランスが変動する	帯の下線から足がスラっと伸びたように見え、より黄金分割に近づく
インパクト	一般的	柄全体が見えて豪華さが増す
歩　行	足さばきが楽で歩きやすい	歩きやすさは普通だが外出時とその用途に迷う

所感として、特に振袖の場合には「礼装」というきものの特徴でもある絵羽模様がよく映えて、きもの本来の美しい柄行が一層引き立つことで、若い人たちのインスタ映え効果による、きものファン層の増加が期待されるのではないか。また、着用時間が短縮できる点は実用的であり、大奥や花嫁を連想させる非日常観は「きものを着てみよう」という行動を促すきっかけになる可能性は高い。それに対し、歩行についてなど、外出先での所作に別の課題が見つかったため、今後は年代別のアンケートや外出時の検証を重ねながら、「おはしょりあり」と「おはしょりなし」の TPO による着分け推奨も視野に入れ、継続して考察を重ねたい。

利益相反の有無

なし

参考文献

図 1）「風俗図屏風（彦根屏風）」国宝　滋賀県　井伊氏
『日本の絵画』［本篇］,筑摩書房,昭和 42 年. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/8798736（参照 2025-03-15）

図 2）生川春明 編『近世女風俗考』,東陽堂,明 28.7. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/767874（参照 2025-03-15）

図 3）春信 画『風俗四季哥仙 竹間鶯』,[高見澤木版社], [19--]. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/9369420（参照 2025-03-15）

図 4）鳥居清長画「美南見十二候」（五月・物詣）
ボストン美術館, 1784 年,
https://cultural.jp/item/arc_nishikie-MFA_21_5607
(参照 2025-03-15))

図 5）喜田川季荘 編『守貞謾稿』巻 11,写.
国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/2592399（参照 2025-03-15）

図 6）楊州周延画「山里の七草」『千代田城大奥の風俗江戸錦』明治 31(1898)～36(1903)年

図 7）喜多川歌麿筆「夏姿美人図」（部分） 絹本着色 埼玉遠山記念館,『原色日本の美術』第 18 巻,小学館,1994.4. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/12676713（参照 2025-03-15）

図 8）東京アートディレクターズクラブ 編『日本の広告美術：明治・大正・昭和』第 1 (ポスター),美術出版社社, 1967.国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/2469104（参照 2025-03-15）

図書

『日本髪と着付け全書』山野愛子（1960）婦人画報
『山野流着装教室初伝教本』 山野愛子ジェーン監修（2014）山野流着装教室
『きもの教本Ⅰ』長沼静（1995）長沼静きもの学院
『きもの教本Ⅱ』長沼静（1994）長沼静きもの学院
『みゆき会 新・道あかり』(戸部幸枝監修)河本靖(2009) 美容総合出版
『帯結び全書』 装道きもの学院（1981）主婦と生活社
『着物着付け教本』山野愛子ジェーン（2011） 国際美容協会
『美容技術理論２』（2018）日本美容教育センター
『きもの知識全書』 山野愛子ジェーン監修（2017） 世界文化社

Universal Kimono Dressing with Diversity
－Kimono for the Visually Impaired－